

2016 年度の事業を振り返って

～業績集の発刊にあたって～

地域の人口減、高齢化の波をひしひしと肌で感じる。こういった時代の戦略として 2016 年度は、時代の変化に『備えよ常に！ Always Be Prepared』を法人単年度方針として掲げ、経営戦略としての地域包括ヘルスケアシステム（統合型医療～介護～福祉法人）構築、深化を目指して事業を進めることとした。

業績においては、恵寿総合病院では外来患者数、新入院患者数の若干の減少を見たものの、1 日あたり入院患者数や病床稼働率のアップや内視鏡件数のアップなどは明るい材料となった。

恵寿金沢病院では、外科の閉鎖に伴う手術件数や外来患者数の減少を見たが、これに比して入院患者数の減少率を低く抑えることができたのは、主力の内科の踏ん張りによるところが大きい。

これら医療部門に比して、介護部門では特に入所、短期入所で好調な利用者数を得た。

医療部門の入院患者数の確保は、介護部門との連携が大きい。同時に介護部門は、そのバックに安心の医療部門が控えている包括ヘルスケア戦略の効果によるものと確信する。

結果として、医療部門が苦戦しながらも、董仙会の今期医業収入は伸び、増収増益の黒字決算となった。

加えて、徳充会も開設 2 年目となるローレルハイツ恵寿の安定もあり同様に増収となり黒字決算となった。



運営面では、6 月に「恵寿式」地域包括ヘルスケアサービスとして、第 1 回日本サービス大賞にて総務大臣賞を受賞した。応募 853 社中 2 位の快挙であり、これまで構築してきた医療の仮想化 IT システムとけいじゅサービスセンター（コールセンター）の充実の賜物といえる。

また、10 月には中部地区の病院で初めてとなる看護師特定行為研修センターを立ち上げた。さらに、介護

福祉職員向けに今年度開設を予定する喀痰吸引等研修センターの立ち上げも準備した。これらは、今後の医療職の働き方改革の一環としてのタスクシフティングに対応する準備とした。

具体的な『備えよ常に！』として、緊急事態に対応した事業継続計画 Business Continuity Plan（BCP）、Business Continuity Management（BCM）を本部、各事業所で策定すると同時に、携帯カードや ICT による安否確認システムを導入した。

今後の職員確保、医療需要への備えとして、中国の医科大学との連携による中国人看護師確保事業も順調に進捗し、2015 年 3 月の外国人患者の受け入れのための『外国人患者受け入れ医療機関認証制度』（JMIP）による認証取得に引き続いて、本年度は 7 月に『地域における外国人患者受け入れ拠点病院』として認定を受け、院内サインの多言語化や通訳機能の充実を図った。

さらに、未来への備えとして、高校生を対象にした出前医療セミナーや、高校生～小学生を対象としたオープンホスピタルを開催した。加えて、七尾青年会議所と連携し、『生涯活躍のまち』構想である CCRC（Continuing Care Retirement Community）構想について意見交換会を実施し、市民を巻き込んだセミナーに協力した。

個人的には、七尾市医師会長としてばかりではなく、公益社団法人全日本病院協会副会長として、内閣府、厚生労働省医政局、保険局、健康局や県、市の多くの審議会に出席、さらには日本専門医機構などの理事にも就任した。また、日本病院団体協議会議長として 13 の病院団体の要望や意見調整を行った。中央における医療制度や診療報酬改定論議を地域医療の目をもって引っ張る気概を持って事に当たっていかなく思う。

2017 年 6 月吉日

けいじゅヘルスケアシステム

社会医療法人財団 董仙会、社会福祉法人 徳充会

理事長 神野正博